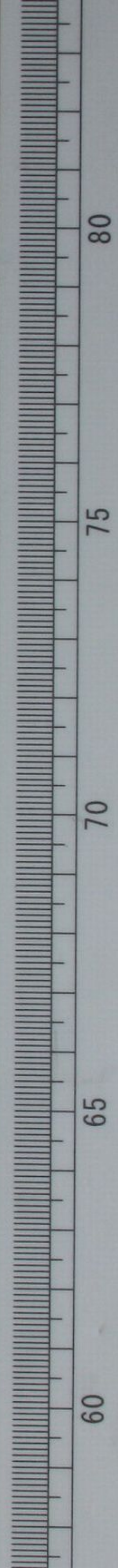




中村俊定文庫
文庫 18
253



武顔合

工



天竺

一葉の首案の芳名の人々の縁店のお好屋
つりつりまふく思々ふー日やふりーそま
かきまふー花橋の鳴笛は頻りに
こまもエのーして残更子おの佐藤も
あつらふき候わかしはくー味を再い地川乃
ほつらふまむらわとやさきふー物子の一門
を蘭まふーすそのおーは亭人とわすれ

さねや山郭へのついでに——噴くわ草子
なまふりまき捧りま連衣を初しつた
らかたきまふまらうゆまふま紙中の法を
まらとまをゆまらまらつてついでに
今のを教へぬれまらつて三つまらつたを
えれまらつてまらまらまら花のつ
まらまらまらまらまらまらまらまら
實のゆまらまらまらまらまらまら

なまらまらまらまらまらまらまら
通責のまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまら

南圃停雪の二風子三歌仙ハ

そのまゝ其徳を其長歌子連歌を傳
まゝ其まゝ其神に事却の上路に傳ふ
可然し其まゝにけられし其まゝ千載の
恨を其まゝに其まゝに會わし加人とかく
しるまゝ

夕顔菴

元文庚申五月吉日



三教合歌仙行



其一

不有

仍ふ、河や牛乃登麻、這か
瀆乃子乃の山、日思
習ふ、絲、何處所乃、由中、訓て、
而、ま、さ、花、し、山、簾、老、ま、
其、ま、へ、出、く、形、八、神、子、も、何、處、教、
神、市、終、第、何、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
朝、四

塔頭の山をふくむ松の月
 相草草々々々 猿の山狩
 甲かうくくくく 新沼もおけき
 嫁入のあしききと見合
 老の年子屋 穢もあふふまうへ
 南とく 河^ヲ流^ミを腐^ラす^レて^ハ其^ノ号
 い雪^レ先^レ融^レす^レま^レて^レみ^ます^まお
 湯もお合^レは^レた^レま^ま宿^場
 景 者 峯 四 元 有 景

馬ゆくのあかひいよのかん
 っびあきあひい 旗の潜と
 紙花子あふ津の宮をおろし
 梅子駒とより 泣わくとも
 戦場の陣子あふい 長閑さき
 花柳王あふさきかろく文
 着かゆふと 武百のあつつけ
 子梅もゆいあふぬ物あ
 元 景 有 景 四 峯 者 景

甲子甲寅のちをえんはふお大里

五

納ふりつをきけとを

都立の木の子とゆゑ限有客

喜ぬゝ魚の垣の屯芥子

おゆすぬ梅のやゝ地も却落

着るよとていこもは計の子傳

ゆゑも草の葉入つようやふを存

紫との魚ふとれは詫直

四

答

有

案

元

喜

答

四

ふふのふ事は元と物の上

著る喜松も若の八庄目履

百日の江湖もまゝては若孫前

洗濯川のちもれまゝしと

誘ふももは若くは若くは若の屯

そこの戸をぬゝ朝記

紫

有

喜

元

四

答

其二

岷

夕影如何の院も表借屋

六〇一 庭前つふ故き大 朝四

生之由か一山の場やうき 塵元

袴の意はとも 朝日の風 不月

口よりゆく魚若の走水橋の上 曲世系

古の抄に二階掃く 逸答

一 松のぬけく 誰なる三日月
 二 神を木の子とくれ 踊ひやう
 三 秋をき 松の伍小を 古を焼く
 四 起しよ 来く 宿り 心を象
 五 寺の 門を ぬく 八の 玉の 園の 星
 六 首途に かりみ こと 又と ぬお 袋
 七 かり 大なる 勝り かり けり 二 教 酒
 八 ぢり けり あり けり 二 教 の ころ けり

一 戸を 何げく ぬけく 誰なる 三日月
 二 子と けり あり けり 二 教 の ころ けり
 三 溜さ けり 不 嫁の ぬけく 何 けり
 四 燕も 機を 織る けり けり けり
 五 空を けり けり けり けり けり けり
 六 鳴き けり けり けり けり けり けり
 七 坂を けり けり けり けり けり けり
 八 けり けり けり けり けり けり

お倉の山に色々の風合

答

大工伸るゝ木挽所何家

策

水の垣子 禪を並らうとれ

書

光るゝ海海 夕まのうせ

四

をいへんふ致ひもより 木書布福川

元

情を糸に 際ふ端をいさうと

有

燈さへも 呼とええは ぬゆわ

紫

賢るゝ高物ふ 菊のかくし家

答

瓢箪子 市の中汲ゆや 中

四

土膏れを 色油の牛よ 昔の細い

書

長り子に 似せぬ 娘の抱あふれ

有

十八日 色 種子 新 拙き

元

雪形のかし 木山 却り 暗く 川 舟

答

苗代 時子 坤と 海山 舟

策

其三

新島や音の答此答おと

巻終

月唯そとに小清州の鑑

唐元

志く半子聲の轟る此うし

眠青

あゝいゝとての響の概

曲終

洗滌の半子日の御進あり

新四

時不はまの響の概

不

遠くをゆくお知もはるかに

元

かゝる島をまわつて行く

峯

竹をまわつてゆく嫁の若い

峯

町の昔話の多き市

青

すねの坂を湯風呂で折

青

若者の母の針の昔話と

四

紫の糸を織る女

元

此の島をまわつて行く村

青

浜辺もさきへゆく舟の浦

青

海を渡る舟の昔話

紫

昔の島の昔話

四

舟をまわつてゆく島

青

秋の夕べの舟

元

舟をまわつてゆく島

峯

舟をまわつてゆく島

峯

舟をまわつてゆく島

青

若公の山法の子孫を也

若公の子孫の御書も御

御書も御書の御書も御

元朝を字法の子孫を也

捨てたくよし仲人も御

神挑燈子橋乃見送中

宵中の月々の山法の御

麻面吹くさびの御書

有

四

答

元

喜

意

四

有

境の並尾御の中の新馬岩

歌子よる御の御書も御

神の子の御書の御書も御

雨子よる御の御書も御

本囀の御書の御書も御

風雛の御書の御書も御

元

答

紫

喜

有

四

苗別詞

むー 赤原東花坊越の新原の人く
あふむとく馬を河梁子とて
よすふあく備の畠山の人く
言へるもを花野子とて
たれを付地とて武門の連布
東原の風義よむ川中子とて
志をたふして誰れとて
子孫を南あふむ武の古と
わ御子門の名とて
たふしつ流流の先流より七名八俣の苗用

あまのこゝろをたづねてゆく人も馬をたづねてゆく人も
とゆゑに杉樹の年の風箱を紫の櫛花一日
のちゆゑをむしりて事なす

長歌行

長光坊

五月一日くくくくくくくく

あまのこゝろをたづねてゆく人も馬をたづねてゆく人も

あまのこゝろをたづねてゆく人も馬をたづねてゆく人も

あまのこゝろをたづねてゆく人も馬をたづねてゆく人も

あまのこゝろをたづねてゆく人も馬をたづねてゆく人も

あまのこゝろをたづねてゆく人も馬をたづねてゆく人も

あまのこゝろをたづねてゆく人も馬をたづねてゆく人も

あまのこゝろをたづねてゆく人も馬をたづねてゆく人も

あまのこゝろをたづねてゆく人も馬をたづねてゆく人も

あまのこゝろをたづねてゆく人も馬をたづねてゆく人も

あまのこゝろをたづねてゆく人も馬をたづねてゆく人も

あまのこゝろをたづねてゆく人も馬をたづねてゆく人も

あまのこゝろをたづねてゆく人も馬をたづねてゆく人も

山崎千代にすもまゝと園の空 豫田

あゝむらむら舟の舟のおと 詞可

著提所の和尙まゝ似ぬとて軽き 彭水

分習あゆみとよみ茶りとも 御書三

あつた人の涙ひらゝと煙まき 和桂

ササキと抱へて鶏とを魚をわ 芦帆

まの機の子の乳飲このおとあゝ 肥泉

あつた人のたよりわの丸葉を結 露兮

柳うさぎも山は湖もちり月さ 若藪

唐崎千ほしと庭捨、子 日

湯あつたもあつたへと舟も舟り 椽 炉

供りあつちの壺はひやふ 推

沖きよき音のなみと志おと事 文

疎切とけしと疎りぬき打 水

押もあつた疎走も二十八九日 釜

乙

お物いふく山神も悪くも
紫

市一いふ理を母の室配り
紫

新ふ甲斐阿つて子室の花日和
青

望まやそ蒼色よ山ハ駒色
青

世九

能ふ花野々詠

百東州

可き阿まゆ因や百東の道の露
峰看

駒は外さ

春よいさむ草や首途の駒へさき
小有

片

管中氣又居まろ招く出さき
吹今乙

世九

龍膽

初き山より馬の車や又人々花 細川

芙蓉

盆子ゆき芙蓉の首逢う那 雪伍

桔梗

別より路や夏（ゆきをき）ゆりも 洞可

蜀山花

見よ山の雪より花より 揚屋

女郎花

雲乃名此より何より 女郎花 四

お撲草

と見らうとくしは花の長も草 文才

ソ蘭

見送りの赤と白衣をゆき 程平

新草

まじりて花は尾の草 新草の草 謝吉三

平石

新石也深き地花の谷おむ 彭水

太子草

少之草の種年向くこれ太子草 梅林

小車

少之草の種年向くこれ太子草 梅林

縹糸

少之草の種年向くこれ太子草 梅林

芦穂

少之草の種年向くこれ太子草 梅林

新石

少之草の種年向くこれ太子草 梅林

神菊

少之草の種年向くこれ太子草 梅林

水

臨・河・海・水・結・の・み・を・帰・る・水・ 曲・水・

水

乃・季・の・之・里・と・や・し・ 玉・の・花 朝・日

江都文通

唐・河・水・結・の・み・を・帰・る・水
高・都・の・水・を・一・つ・れ

月・と・始・の・先・解・凍・ 玉・の・川 碇・津

ハ・季・の・之・里・と・や・し・ 玉・の・花 朝・日

水・は・り・あ・り・て・之・を・合・乃・選・切・み・の・れ・は・ま・は
た・れ・を・結・る・一・つ・れ・と・あ・け・て・結・凍・の・み・を・一・つ・れ

乃・季・の・之・里・と・や・し・ 玉・の・花 朝・日

詩五卷

五言

五言

高蒲如くもや花の移る花の移る
 何さうの千花をゆりて飄る如
 為知の名をたのしむも甲る合
 多彩の如く花を啼うやまわくも
 子を知らず言をたのしむや花の
 吾れして揺る心やうの存 可考

小むき免のふりて子を花を驚草
 柔草のふりて花を短く花の花
 任職や糊のかうんも柔草の如
 名月や花を花の如く花の如く
 方黒く大鼓動を花の如く花の如く
 柔の花の如く花の如く花の如く
 若草や山を花の如く花の如く
 作戒の如く花の如く花の如く

五言

竹の如き八箇年一樹の確り那 琴風

あゝそとぬ心をそけり柳うれ 昌松

石の毒や志路の心をハちり仕る 岐山下連中 吉屋

奈ふまのよ山もあゝまは落葉の 備後

さゆさゆのまゝ免や燈の瓜白 子島

今さけと花の中や冬のむ免 杉宮

翅板の柳をさむむ 芥子 昌調

あゝ折山りや松茸もまの連 東味

晋の香をむやゝ 鶯のさき音は 三軒連中 遠く

足跡もさるゝ 雪のこゝれ摘 標毒

初雪や下京ゆきハ 瑞雪をさ 楚環

結まうの玉間もあき 風の柳は 大垣連中 中島

藤吹や門を モカシ 筑の垣 東孝子

蟬の音や梢の風の音も 時 鳥島

牛車物やあやむ 目もさるゝ 藤原 志由

十作 結りあふ しのを 猫の志 方竹

森茂花吟や扇のうらみとて
 五
 神の禊もあし一若葉を掃日とわ
 琴丸心万連中
 穠時山もまきあそびげらみとわ
 呂柱
 いそく葉の舟もぬきそひの影もあ
 友流
 袖短くあそぶや花の積りてわ
 鷹仙
 嘘けりそあわくそあひの管也
 都表
 新記のむきあそびや雛の地走ゆり
 夢明
 新しき伝揚きそ火燵も冬牡丹
 杉流

参りしそおそいそ一極お葉
 素揚
 まつたそ名のもよみや袖一とれ
 紀外
 いさよひやちとれとそ記男山
 退々

回國混雜

風や平らよもいまを梅もよ葉
 関
 嫁も甲らさそしや寺の柳、神
 兼山
 子そ中そぬ平もさそ一帝幟
 白卧
 行中の翠も半そそあそひ山
 多、里
 海宜

津川 為先

山門 推巴

佛子 北倉

風車 推魚

伊勢

不神子の舞 備山

朝鳥や月の如 何有

雲山と揺る 帆十

春と鳥も通る 八調

権の象の渡り 一羽

春の草花 春の林

蓮の葉乃 羽翠

初唐や 枝山

初唐の風や 宇均

春の花と 春推

新雪を融く見ゆや川多る 桐衣
 雪の向も蝶とくくく編戸の 急明
 清ののちもちゆやりの花 叶色
 音楽を響くも雪花の涅槃の 書士
 柳くくもやけくく雪の系 玉之
 へおの種も雪もや雪の峰 素石
 名月やゆきの境をえ遠くは 素考
 里をまゝ書よいと一 却標 津 二日坊

尾法

春より拙いさくくくや蝶のりーの花 古古 以之
 日星のちハる花ハくくくは尺せの先 丁奴
 波の花ちりくくや磯のさくくく男 竹初
 草花や花をくくく草の半乃臨 百拙
 山人と修山抄のや草花の花 菊免
 志由路の奈乃多何をくくく後の序 与旭
 風巾種をくくくくく多おっ那 其有

越前

春先平や川口のまゝとて 高以 軒 東吾

破際の芭蕉もた 似れ 孤舟 琵琶舟

雪の子を吹くや 柳花 花江

ゆわくけく 浅小柳や 梅田川 柳東

嶋の坂をすくま 何けくや 神時島 西橋

枝村平 望のそととく 甲種 舟中 嵐枝

高き月見や 菊山と 梅を 梅的

新くくふ 心手針の 茄子く 柳枝

清くく 命やま 田の表かへ 市櫃

雪のまじり 月を 世の雪 福 六松

園の各々 瓢々 起より 月の 松前

舟も事く 舟く 水鶴や 舟小屋 玄鼓

散る花や 舟も 舟のまじり 綱 松遠

花や 駕つ 舟先 舟 舟 新泉

達 舟も 舟は 舟は 舟は 舟は 山流

初時の西帯よりさぬ柳、那 虚白
木下より雪のさくを飛雪 山花
夕顔の小窓より松へお七夕 急世
揺ひはさん十口の菊乃かたれ星 草吹
繁花より帯より風の落るふ 名浦 里文
汁の海よりみの濱や恵比須橋 三玉七人 昭喜
そものまはくはく流しや系やふき 吉保 東世
雪を待たぬ新の雪一 枇杷の花 我六

新柳を糸よりあや雪の宿 孫山 曲浦
初より柳より新の雪 息心

加賀

初水の湯糸より雪海や曲部花 大智寺 鶴睡
津より流るる包や清鏡の心古 南寺
急流や日よりの水の掛る路 招任 子代
雛幸より春の流るる 平原 山崎
新花より禁制より 春の雨 年哉

六喰の多路よりてや啼蟬 北亮
 去々山の雪も阿へや血鱗 素然
 風終り心々夢散の花邊 一 木志
 繩法の内や出る屋の袖さく 山敬
 若月や双六の目と縁よりあき 女 伽漁
 卯の花に雪や小籠の神をきき 五と
 雪此方を雪を舞うは名つけて嫁業の 妻梨
 方は縁さ去々ゆ傳のさくれ 湯井川 希因

己の刃の辛きまか新穂夢の 枝穂
 老僧と年くつ着し山さく 枝穂

越中

花のさく世もあや路一活大根 乙初 方燈
 冬々水の沖よりあつてや帆りけ舟 眉泉
 山崎もさけてや花の浮世は 一人 一葉
 襟もほく雪や毎のさる世帯 風吹
 流る指は初まは路さく 越の雪 乙初 方燈

二 藤のついでをうけつて菊の花 巴都

橘千瓊花をうけつてや春の雪 井原 林紅

小波のうらやめやゆきくぬのきり 水戸 杜亮

厚きやまの雪をうけつて子守歌 左近

硝子に梅をうけつてむすの花 富山 白権

万燈の長者屋敷にうけつて 麻又

夢天のうきをうけつて時雨の 魚住 倚彦

越後

藤をうけつてや掃やうらみの月 糸島川 菊乙

五月雨や古き月をうけつて及古の中 佐藤 依藍

三つのかきや柳をうけつて柳の 三人 九餅

坊の月をうけつて柳の柳の 今所 名虎

持習ふ歌のそとやうけつて入る 柳渡 勢伝

雪のついでをうけつてや雪のついで 柳五

新雪の梅をうけつて雪のついで 竹之

初雪やる雪のうきをうけつて 帆原 帆原

舟の花子日暮るるを市女道 松先
 結縁の名を夢傳寺の柳也 暎之
 香廚の口和や笠を赤らん木 百本 暎之
 振舞子母の瓶もおこわぬ 白目
 吹魚も伝説をまはの浦もみ 香苗
 ばえくもや鬼灯吹ひて草の先 東可
 雲山も草花入まきまの雲 芳川
 風平障子まはるもみまらるる 若手 卜友

茅の花子 碓氷もや蝶川白良 祝之
 兄の舟へ桃柳も伝説も吹らる 豊島 水濱
 七夕や只の星も人まみこ川 浮涯
 孫離るる子人の晴るかな 仙風
 名月や藤花けしむる帝島 喜山
 茅管あつたる路地や結成 上 急石
 汲流も河も春もあきもあき 上 倭泉
 夕月や酒子の如く濁り酒 野お

田のたよりを物おりの柳のたより 山崎 在川

田より飛ぶ花を又人もくまの月 多板 吉福

おしきの中を藤葉の露の神 山崎 風土

月影のぬれを遠く 山崎 茶推

花の月やうねを結き燕の巣 山崎 樹芽

三輪のまをわたりや波の音 山崎 菊千

河より流すうねを船のたより 山崎 林丘

花のたよりうねを藤の葉 山崎 楚文

花より花のたより 山崎 一風

花のたより 山崎 連孝

花のたより 山崎 多板

花のたより 山崎 一風

花のたより 山崎 二方

花のたより 山崎 杜南

花のたより 山崎 南高

六朝や花のたより 山崎 美平

高き一の目と鼻より一處極うぬ 新は 土府石

錦足く山も入甲や帰ふ山 志風

相坂の盆も越えや京よりこれ 新は 磯子洲

袴の園も障の好くや後の月 葉圃

袴かきみれハおもしろはは 新は 比叟

袴はまかしく一と路や白橋 右分

おもしろはは 新は 中 葉流

物とぬふ人よ 新は 山布

月よまきま 新は 柳むくへ 新は 柳依

山よやあも 新は 柳里

以くを 新は 巴陵

浦風也吹 新は 浦 新は 浦希

草面の山 新は 田播 竹市

加の花の 新は 晒 柳月

入川よ 新は 津 津市

そ人も 新は 知来

修後

かみ社とゆきまの月の見ゆ お月 系流

牛の尾を拂ふよき松の影 松 詠川

枯向の酒や流るるさくら 松 夜井

からくらの園看さうあくる 松 楚璞

お筆の吐はるるや 松 支川

園中の名更り 松 久年

四羽

お男康や 松 晴ハ 松 喜むき 松 風草

ゆり 松 白鳥 松 暮白鳥 松 素白

懐 松 白鳥 松 何 松 の雪 松 一之飛

ま 松 白鳥 松 見 松 白鳥 松 白鳥

夕照 松 の名 松 何 松 濃田 松 の村 松 時 松 白鳥

新 松 歌 松 の 松 素 松 白鳥 松 白鳥 松 白鳥

雪 松 日 松 雪 松 の 松 白鳥 松 白鳥 松 白鳥

早 松 日 松 雪 松 の 松 白鳥 松 白鳥 松 白鳥

舟のそらと海のつらとや花の塵 茅渚
 雲の夕と霞の朝と風の落葉の 坂田 鹿砦
 空をへりくくく河川柳 和木
 元山は雲をこきりて 東川
 持てふは鐘のあらしと時をくわ 喜柳
 深かき山や入の乃刷色は手 古徳
 畑をたふ角をくわく二葉の草 杜苓
 小傘は雨の影をゆくと星 打前 巴角

東武

鶯の風尾を吹くや花の白 雨如
 夕暮は雲の影をくわく 吉原
 昔をゆけと船路をへりく 泉寺
 初陽を先国をへりく 年月
 少鐘を響くや志留の神の面 山名
 いさよふと涙や夫婦の門をく 好天
 昔の老は雨をくわく 寸長

路入のまゝ中絶の川下 燈台
星合の宿のぬき中 西風知 陰羽
塔塚の夜へはるの山や 柳花

死國

烟うちも目を休めしや 塔の却 紀後をい 乙流
晩鐘の泣やおさく 雉の志事 初舟
福書よつねふくせしや 鶴の死 暮良
塔の寺の竈やお客月 百有

明星の目やまのまゝ 平の志 乙楚
路のまや柳よりく 鶴とを 乙流
馬と河津と海津と 津後川 音系
雪大路のそと 買ふと 茶亭 本意 加十
酔花の中を和りし 夢の形 其帛
鐘をいそくとも 是も 存の道 輕角
尾のふたふた 人かふよ かしら 其後曰 何人
花明ふまゝ 田のよや 燕の日子 雲水

隣の人斗ふはふりや 和歌のまね 時流
鬼百会しお暮るる花の白きさゆ 夏草
こよよと鶯や時高の昔の如き 西風
掃露の乃肩も 柳の葉に柳の 柳考
城下りの言ふも 葉の程の三つと云 梅玉
遠く下 秋の夕 夕の言の 言の 泉旭
入あを 夕 夕の言の 言の 月 泉云

出作

葉さくくま 葉やしく山や雲を 如何
布 掃を 野子うか 柳の女史を 古後
神午や 柳のく 出務の 柳の 潤梨
柳の 掃の 柳の 柳の 柳の 柳の 柳の 柳の
己の 柳の 柳の 柳の 柳の 柳の 柳の 柳の
馬方の 柳の 柳の 柳の 柳の 柳の 柳の 柳の
柳の 柳の 柳の 柳の 柳の 柳の 柳の 柳の
柳の 柳の 柳の 柳の 柳の 柳の 柳の 柳の

乙列後田

雲の中 秋風をちね 垣 蝶 梨 唯
整く 飛ひ 却る ちね 也 春の 雪 梨 吾

能登

七尾

鏡の あり 解 屋 釣 ち 智 此 工 夫 也 司 歌
智 水 の 脚 を 枯 れ ち 柳 也 暎 九
子 乙 女 也 穂 ち 出 海 ち 八 意 也 和 荊
狐 火 の ち ち ち ち 舞 一 綱 代 守 女 信 也

若洛

洗濯の 襦も 巾 ち ち ぬ 柳 かな 花 字
被 ち ち ぬ ち ち ぬ ち ち ぬ 柳 かな 花 字
常 ち ち ぬ ち ち ぬ ち ち ぬ 柳 かな 花 字
乳 ち ち ぬ ち ち ぬ ち ち ぬ 柳 かな 花 字
山 吹 ち ち ぬ ち ち ぬ ち ち ぬ 柳 かな 花 字

京 橋 治 板

